

学位論文
〈要約〉

茶陶にみる露胎の位置付けと賞玩の諸相

－ 16・17 世紀の茶書の分析から －

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻
造形芸術教育学領域

D182185 金好友子

目次

はじめに

序章 研究の概要

第1節 問題の所在

第2節 先行研究の検討

第1項 瀬戸・美濃窯における大窯編年に関する研究

第2項 瀬戸・美濃窯の製品にみる製品と露胎の展開

第3項 瀬戸黒茶碗と黒楽茶碗の比較研究

第4項 奥高麗茶碗と高麗茶碗の比較研究

第5項 茶陶鑑賞の研究

第3節 研究課題と目的

第4節 研究の年代と対象

第5節 研究方法

第1章 茶陶と露胎

第1節 茶陶とは何か

第1項 定義

第2項 特質

第2節 露胎とは何か

第1項 定義

第2項 種類

第2章 茶人の土への眼差し

第1節 三大茶会記にみる露胎の記事

第2節 露胎を表す言葉

第1項 土

第2項 釉薬に着目した表現

第3項 火間と石間

第3節 露胎の扱いに関する教え

第1項 茶入

第2項 茶壺

第3項 茶碗と天目

第3章 茶入の露胎

第1節 茶入の分類

第2節 賞玩の視点と評価

第1項 土色

第2項 細かさ

第3項 底つくり

第4項 釉薬と露胎の関係性

① 露胎範囲

② なだれ

③ 指跡

第4章 茶壺の露胎

第1節 茶壺の歴史

第2節 茶壺の分類

第3節 賞玩の視点と評価

第1項 土色

第2項 細かさ

第3項 露胎範囲

第4項 土の膨らみ（瘤）

第5章 茶碗と天目

第1節 茶碗

第1項 茶碗の意味

第2項 総釉から露胎への転換

第3項 露胎の多様化

① 黒釉系茶碗

② 志野茶碗

③ 考察

第4項 賞玩の視点と評価

第2節 天目

第1項 天目にみる疑似露胎

第2項 賞玩の視点と評価

終章 露胎の位置付けと賞玩の諸相

第1節 茶人が捉えた露胎の姿

第1項 茶入の露胎への関心の高さ

第2項 考察

第2節 賞玩の諸相

第3節 露胎の新たな位置付け

結語

謝辞

註

調査史料一覧

三大茶会記にみる露胎に関する記事総覧

調査対象とした美濃茶碗一覧

図出典一覧

参考文献

序章 研究の概要

日本は世界でも稀にみる、豊かな陶磁文化を育んだ国である。日本人は器に機能性のみを求めるのではなく、四季の移ろいや趣向に合わせて器を取り合わせ、愛でて愉しむ。そこには、やきものが人々の感性を刺激し、精神性を高める文化的な営みが存在する。こうした日本の陶磁文化の創成に、茶の湯の果たした役割は大きい。茶の湯は喫茶を主体とした室内芸能で、茶を喫するための茶入や茶碗をはじめ、懐石で用いる向付や鉢、香合、花入など多くの陶磁器を取り合わせて趣向を表す。茶人は、こうしたやきものの何に魅力を見出したのであろうか。

茶陶の賞玩の要点について、山上宗二（1544～90）が著した『山上宗二記』（天正16（1588）年）には、なり（形状）・ころ（大きさ）・様子・葉（釉葉）・土の五つを挙げる。このうち、筆者が着目したのが土である。土とは施釉陶器のうち、釉葉が掛からず胎土が見えている部分を指す。現代は、これを露胎や土見せと呼ぶ。無釉の露胎には土の豊かな表情がうかがえ、より一層やきものの美しさに奥行きを生む効果がある。茶陶に限らず施釉陶器の釉葉は、装飾的効果にくわえ、強度の向上や汚れ・漏れを防止する機能性にも優れるが、露胎はこうした役割が果たされず、欠点として捉えられることも多い。しかし、茶人は露胎に美しさを見出し、賞玩した。

先行研究では、瀬戸・美濃窯の製品にみる高台周辺の露胎の変遷が示されたほか、露胎は製品の量産化への志向とそれに伴う省力化の結果、出現した造形と指摘された。また、研究者や古陶磁愛好家らは自らを鑑賞主体として、近現代の美意識や価値基準で露胎の意味を論じた。しかし、これらは執筆者が主観的な鑑賞論を唱えたもので、いずれの説も論理的な根拠は提示されてい

い。すなわち、茶陶を用いた茶人の露胎への認識や価値基準が見過ごされている点が課題である。そのため、茶陶が茶の湯において高い関心を集め、評価された原点となる時代に立ち戻り、茶人が捉えた露胎の意味や意義を明らかにする必要がある。

本研究は16・17世紀の茶の湯における、茶人の露胎に対する認識および、露胎の賞玩の視点とその評価を明らかにすることを目的とする。それを踏まえ、露胎の新たな位置付けを提示する。本研究は、使い手の立場から茶陶の露胎について学術的に論じる初めての研究である。また、室町後期から江戸前期にかけては、茶の湯の変容と隆盛に伴い窯業が長足の進歩を遂げ、舶来品の受容とその模倣品の製造から脱却し、日本各地の窯で意匠を凝らした茶陶が数多く生み出されるなど、日本陶磁史における重要な時代となった。こうした時代における露胎の賞玩の諸相と位置付けを明確にすることは、茶の湯文化において醸成された陶磁に対する特有の価値観を解明する一助となるのではないだろうか。

対象とする年代は、16・17世紀である。とくに茶室に亭主と客が同座し、そこに取り合わされた茶道具を用いて、亭主が客の目の前で茶を喫する寄合形式の茶の湯が成立した室町時代後期から、日本で茶陶の創造が活発に行われた江戸時代前期までを中心に考察する。研究対象とする道具は、器体に露胎が顕著にみられること、茶会において客が手にとり賞玩できること、文献史料の調査から得られる情報量を選択基準とし、茶入・茶壺・茶碗・天目の四器種とした。研究方法は、茶の湯に関わる文献史料の調査である。

第1章 茶陶と露胎

茶陶とは、茶の湯で用いられる陶磁器の総称である。茶陶は茶の湯の場においてのみ使用される特別な道具であり、道具そのものにくわえて伝来が重要視される点に特色がある。また、亭主は茶陶やその他の道具を取り合わせることで茶会の趣向を表現し、客は茶陶の賞玩をとおして亭主の作意や想いを汲み取るという、主客の交感を促す役割を担うものでもある。

露胎とは、施釉陶器のうち器体の一部に釉薬や化粧土が掛かっておらず、胎土が見える状態、およびその部分のことと定義する。露胎にはさまざまな種類があり、施釉段階で器表に釉薬が掛け残された結果できた露胎には、①畳付から腰部にかけて広がる露胎[図1]。②本来釉薬が掛けられるはずの一部が露胎となり、素地が見えているもの(釉切れ・釉抜け・指跡・火間)[図2]。③器物の見込に残る釉薬を剥がしてできた蛇の目釉剥ぎ、の三つがある。また、釉薬が経年変化や外的要因により剥離してできた露胎には、①焼成温度の過不足や、焼成後の湿気により肩部分の釉薬が剥脱した肩脱茶壺、②目を用いて器物を焼成した時に見込や底部に残る痕跡である目跡、の二つがある。

一方、和物天目や瀬戸茶入には、高台周辺に錆釉による化粧掛けがされている。これは、唐物の露胎にみられる土色の再現を試みたものと考えられ、胎土上に何かが施された点で露胎の定義に反するが、高台周辺に露胎を設ける意識がうかがえ、露胎の表現の一つとも解釈できる。したがって、本研究では錆釉が施された高台周辺部を「疑似露胎」と称することとする。



〔図1〕唐物茶入 銘「利休円座」五島美術館蔵

第2章 茶人の土への眼差し

本章では、三大茶会記にみる露胎の記事、露胎を表す言葉、露胎の扱いに関する教えの三つの観点から、茶人の露胎に対する関心や認識について考察した。

第1節 三大茶会記にみる露胎の記事

まず、『松屋会記』『天王寺屋会記』『神屋宗湛日記』の三大茶会記に記録された露胎の記事を分析した。『松屋会記』の露胎の記事は36か所と三大茶会記のうち最も少なく、内容は簡略である。器種別にみると、茶入が24か所と全体のおよそ66%を占め、茶壺が6か所、天目が2か所で、茶碗の記事は見られなかった。茶入の記事は、土色と底つくりに関する記事が大半を占める。

『天王寺屋会記』の他会記にみる茶会の数は1653会で、そのうち露胎の記事は143か所である。その大部分は二代宗及の他会記に頼っており、とくに「宗及他会記」の天正年間における記事数は50か所と、三分の一以上にのぼる。器種別にみると、茶入が87か所と全体の6割を占め、天目21、茶壺16、茶碗5と減少する。とくに「宗及他会記」にみる唐物茶入の拝見記は緻密で、土色や土の細かさ、堅さ、底つくり、露胎範囲、評価に至るまで詳細に記す。茶入の次に露胎の様子を詳しく記した道具は茶壺で、土色、露胎範囲、瘤に関する記述がみられる。一方、天目や茶碗の内容は、比較的簡素である。

『神屋宗湛日記』は三大茶会記のうち最も記載年数は短いものの、露胎の記事は97か所でみられる。天正年間の記事が最も多く、全体の約8割にのぼる。器種別にみると、茶入がおよそ半数を占め、次いで茶壺、天目、茶碗の順に減少する。

このように、茶入の露胎に関する記事がいずれの時代も最多で、記事全体の半数以上を占める一方、茶碗の記事が最も少なく、全体の3%にも満たないことがわかった。また、茶壺の記事数は茶入に次いで多いが、慶長年間以降その姿を見なくなり、第3位の天目の露胎に関する記事は文禄年間以降、登場しなくなることを示した。

第2節 露胎を表す言葉

露胎を表す言葉を整理したうえで、言葉に込められた意味や意図を考察し、茶人が露胎に寄せた関心や認識を明らかにした。最も古くから露胎を表す言葉として用いられたのは、「土」の語である。16世紀前期には器種を問わず露胎を土と呼びはじめ、その後も多用された。土の語が記された初期の史料は土色に関する内容が大半を占めていたが、天正年間になるとそれに土の評価が加わり、さらに土の細かさや露胎範囲など、さまざまな露胎の様子に眼差しが向けられ、より詳細な記述が認められるようになる。また、土見せの語源と考えられる「土ノ見へ候所」や「土ヲ見ル」という表現は、同系統の作品に露胎があることが稀な場合や、露胎範囲に特徴がある作品に用いられることが多い傾向にある。これは、茶人が露胎の有無や器表を占める露胎の割合に関心を寄せていたことを示している。

一方、釉薬に着目した間接的な露胎の表現に「薬ナシノ土」「薬ノ懸ハツシ」「薬留りより底ノ角まで」などがある。これらは、敢えて釉薬の掛かっていない部分と表現することで、露胎を強調する意図があったと考えられる。多くの場合、こうした言葉の後には、露胎の様子や長さが付記され、茶人は露胎に現れた景色や露胎範囲に関心を向けたことが明らかである。

また、土や釉薬に着目した表現のほかに、露胎を火間や石間とも称した。二語には指跡という共通の意味と異なる意味がある。指跡とは施釉の際に器体を指でつまみ、釉薬が掛からなかった部分を指す[図2]。用例から二語の使い分けには明確な基準はなく、執筆者の癖によるものとわかった。火間には釉薬の中に斑点状に出現した胎土という意味がある。一方、石間は、釉薬の縮れによって出現した胎土が釉薬の表情と相まって砂膚のようにみえる状態を指す。いずれも茶入の器表に出現した小さな露胎を表す際に、限定的に用いられた。茶人が小さな露胎に特別な名称を与え、器体底部の広範囲な露胎の様子と呼び分けたことは、偶然出現した露胎を景色と捉え、賞玩の視点として認識したことの表れといえよう。



[図2] 唐物茶入 銘「北野茄子」野村美術館蔵

第3節 露胎の扱いに関する教え

茶の湯の作法の教えが記される史料を手掛かりとして、器種ごとに露胎の扱いを整理し、茶人の露胎の賞玩に対する意識を明らかにした。茶入は、茶陶のなかで露胎の扱いに関する教えが最も多い器種である。扱いの要点は、次の五つである。①茶入の底は手に取って見ること。②手の汗や脂など汚れが露胎に付着するのを防ぐため、唐物茶入は手拭きで手を拭いたうえで、露胎には手や指を触れないように見ること。④瀬戸茶入は膝や袴で手を拭いて見ること。⑤粗相をしないよう、茶入の露胎はあまり入念に見ないこと。このように、茶入の露胎の扱いに関する教えは各書で詳説されており、茶人は茶入の露胎を重要な賞玩点として認識していたことを示している。

茶壺は碾茶を充填して運搬し、貯蔵するための容器で、普段は客の眼に触れない場所に保管されており、客が茶壺の拝見を所望できる機会は口切の茶会に限られる。そして、慶長年間以降、急激に道具の格付けが下がり、茶会で用いられる機会が減少したことも影響し、茶壺の露胎の扱い方の教えは説かれていない。茶碗の露胎の扱いについても、特別な教えは認められない。天目を扱う際には露胎へ手を触れないように、という教えが唯一説かれたのみである。これは、茶入と同様に、手の汗や脂が露胎に付着し、本来の土の様子が損なわれないようにするためである。

以上のように、三つの観点から茶人の露胎への認識について分析した結果、茶入、茶壺、茶碗、天目の露胎が同等の関心を集めたわけではなく、器種によって認識の程度に差がみられた。そして、茶入の露胎へ最も高い関心を寄せていたことを明らかにした。

第3章 茶入の露胎

茶入の賞玩の視点は、土色、細かさ、底づくり、露胎範囲、なだれ、指跡の六つである。このうち指跡を除く五つの視点には、明確な評価基準があり、露胎は道具の評価に関わる重要な位置を占めたことがわかった。

まず、土色についてである。16世紀の史料にみる土色の表現は、黄、よもぎ、紫、薄紫、浅黄、浅黄濃、青白、赤、薄赤、黄赤、赤黒め、薄紅梅、朱、薄朱、白、黒であることがわかった。同系色の色味に濃淡を付すことは早くから行われ、さらに微妙な色味を表現する方法として、～ミ、～心、～メと色名の語尾にわずかな違いを醸す言葉を付したり、数色併記したりするなどの工夫がみられるようになる。しかし、史料に記された土色には明確な定義がなく、執筆者の主観的な色感に頼ったものである。

築水居主人（生没年不詳）によって編集された『茶器弁玉集』（寛文 12（1672）年）巻三「土之次第」には、「紫土、朱土、鼠色土、浅黄色土、田土、土色、緋底緋色」の七色の土が解説され、はじめて各色の定義が示された。これにより土色の表現は統一化をみせ、客観的な土色の理解が可能となり、茶入の分類や特徴を見極める一つの基準となった。そして、土色が茶入の特徴の理解に役立ち、種類を見分ける一つの基準となった。高く評価された土色は、赤味を帯びた黒色を意味する紫色と、浅黄色である。一方、低く評価した土色は黒と濃い赤で、とくに赤色の土の場合、色の濃淡が評価を左右したことが明らかとなった。

次に、土の細かさについてである。『茶器弁玉集』巻三「漉土之事」では、土を水に入れて攪拌し、砂気を除いた細かい土を意味する漉土を最上の土と評価する。また、同書の巻五「唐物茶入部」の序文には、土は細かく漉土で、その様子が脂のように粘り気があるものが優れた茶入であると記された。その他の史料の分析から、細かい土に関する記述が粗い土のそれを大きく上回ることがわかった。このように、茶入は細かい土の方が高い評価を得たことが明らかである。

底づくりについては、16世紀中頃には底づくりを糸切とへげ底に大別して呼び分け、17世紀前期になると糸切の細分類が行われるようになり、底の様子が図とともに詳しく解説された。糸切は轆轤の回転方向に応じて相違があることが見出され、その違いは唐物と和物によるものと考えられた。茶人は底づくりを茶入を理解するための重要な手掛かりとし意識し、高い関心を寄せていたといえる。評価については、へげ底の評価に関する記事はきわめて少なく不詳であるが、糸切は唐物・和物を問わず、糸目が細く繊細なものが好まれていたことが明らかとなった。

露胎範囲は、種類の違いにより両極の評価を得た。肩衝・大海は露胎範囲が広い脛高のものの評価が高いのに対し、小壺は脛高の評価が低い。脛高とは、釉薬が上部で高くとまり露胎が広く現れたものをいう。これは、器表を占める釉薬と露胎の割合と茶入の形状が深く関係しており、背丈と形状の違いで美しく見える露胎の広さが変化するために生じた相違と考えられる。

なだれとは、窯内で釉薬が流下して自然にできた釉薬と、露胎が織りなす景色である。釉薬の流下によるなだれの景色は、留まる位置と数に大きな関心が寄せられ、茶入を飾る時の正面（置形）を決める際の重要な指標とされた。すなわち、唐物茶入の場合、露胎から底にかけて一筋垂れたものを置形に据え、高く評価する傾向がみられた。茶会記にみるなだれの記事のうち、比較的露胎範囲の広い肩衝が占める割合は約75%で、そのうち一筋のなだれの記事が最多であった。なだれは腰から畳付にかけて露胎が設けられることで、より一層際立つ賞玩の視点であるといえよう。

一方、茶会記や名物記などには、指跡を最も優れた景色として捉え、置形にした記事もみられる。置形には美しい景をなしたなだれを据えることが多いが、中には釉調に特徴がないものや景色が複数あるものもある。その場合、指跡を第一の見所として置形に据えることもあった。指跡には評価基準がないが、置形を決める役割を果たす重要な造形であることが明らかとなった。

以上のように、茶人は茶入の露胎にきわめて高い関心を持ち、さまざまな景色を賞玩の視点として捉えていたことがわかった。そして土色、細かさ、底づくり（糸切のみ）、露胎範囲、なだれについて、具体的な評価基準があったことを明らかにした。

第4章 茶壺の露胎

茶壺の賞玩の視点は土色、細かさ、露胎範囲、瘤の四つである。茶壺の土色は、紫のような黒を呈した土色が高く評価された。茶会記に記された茶壺の土色は黒系統と赤系統が大半を占め、こうした色調の茶壺が関心を集めたことがわかる。

土の細かさについては、細粗の違いによる記事数の差異はなく、評価に関する記事も見受けら

れなかった。そのため、茶壺の土の細かさには厳格な評価の規範はなく、多様な土肌の様子を賞美していたと考えられる。

露胎範囲については、脛高の茶壺と肩脱茶壺が高い評価を得たことが明らかとなった。ただし、脛高として高く評価されたのは清香茶壺に限る。露胎範囲が広すぎる様子は素足に例えられ、真壺など格の高い茶壺の場合、脛高の程度が大きいものは好まれなかった。

瘤については、茶壺の特徴を記録した箇所にも瘤の有無や数、大きさの記述が多くみえる。茶人は瘤を島や石などの景色に見立て、それに美的価値を与えて賞玩の対象とし、瘤が多く優れた景色がみられるものを高く評価した。瘤の存在が、茶壺そのものの評価に大きな意味をもっていたことが明らかとなった。

第5章 茶碗と天目の露胎

第1節 茶碗

茶碗は茶陶のなかで、その造形を最も大きく変化させた道具といっても過言ではない。茶碗にみられる変化の一つが、総釉から露胎への転換である。青磁や染付など唐物の茶碗や、16世紀までの茶会記に出現する三島、井戸、粉引、割高台といった高麗茶碗は、器表全面が釉薬で覆われた総釉であった。ところが、16世紀中頃になると和物茶碗の製造がはじまり、これまでの規範を破って高台周辺に露胎を設けるようになる。

16・17世紀初期につくられた和物茶碗にみる露胎について、茶陶製造の中心的な窯として新たなやきものの創造を牽引した美濃窯の茶碗を分析した。すると、露胎のあるものが主体をなし、新たな器形、釉薬や絵付の加飾方法が登場に伴い、露胎の範囲や形状が多様化していく傾向がみられた。これは、ただ器表に釉薬を施さない部分を設けるだけでなく、露胎が占める割合を意図的に調整したことを示唆している。すなわち、器の溶着を防ぎ生産効率を上昇させるという機能性を第一義的な目的とする露胎の在り方から、茶碗を装飾する要素の一つとしての露胎の在り方へと、しだいに露胎のもつ意味が変化していったと考えられる。一方で露胎の多様化は、窯や作り手によって違いを見せる施釉方法や癖によるものとも考えられるが、美濃窯の茶碗は露胎のある茶碗を製造し続け、露胎の造形が多様化していくことを明確に示している。

こうして16世紀に茶碗の高台周辺の露胎は大きな変化を遂げたが、茶碗の露胎に関する記事は、土色と露胎範囲について数例みられるのみである。土色に関しては、紫が2例確認された。露胎範囲に関しては、青磁茶碗と井戸茶碗の解説で1例ずつみえ、その内容はそれらの高台に釉薬が掛かっていないことを示すものであった。通常、総釉を基本とする両茶碗の高台に土が見える様子が目新しく映り、取り立てて記録したものと考えられる。ただし、土色や露胎範囲の善し悪しには言及しておらず、露胎の評価は不詳である。茶碗の露胎に関する記事は他の器種と比較して極端に少なく、内容も簡略であることから、史料の分析からは茶人の茶碗の露胎に対する関心は最も低いと言わざるを得ない。

第2節 天目

和物天目は建盞写しの製造にはじまり、日本特有の天目の創造と灰被写し、そして灰被写しの量産化と展開していく中で、露胎の造形を変化させる。建盞にみる土色の摸倣を目的として露胎に錆釉を施した疑似露胎から、徐々に錆釉の濃度を薄くする過程を経て、最終的に真の露胎に至った。粘土の改良や生産体制の変化、天目を需要する人々の美意識の変容などの要因が重なり、疑似露胎は17世紀前半にはほぼ見られなくなり、和物天目は露胎が主流となった。

天目の露胎に関する記事は、土色と露胎範囲である。土色が大半を占め、茶人は天目の露胎が何色を呈しているかに高い関心を寄せたことがわかる。そして、高い評価を得た土色とは、紫と黒であることが明らかとなった。また、露胎範囲に関する記事は2例のみである。どちらも二重掛けされた釉薬のうち、外側の釉薬が脛高であることを示しているが、それについて善し悪しは述べられておらず、天目の露胎範囲の評価は詳らかではない。

終章 露胎の位置付けと賞玩の諸相

第1節 茶人が捉えた露胎の姿

茶入、茶壺、茶碗、天目の露胎のうち、茶人が最も高い関心を寄せた器種が茶入である。茶入には他の器種にはない五つの傾向が見られた。一つ目は、拝見記の多さである。三大茶会記における拝見記を器種別にみると、茶入の割合は全体の半数以上を占めることが明らかとなった。

二つ目は、露胎を表す言葉が豊富なことである。茶入の土色は濃淡や微妙な色味の表現が豊かで、それは20種類にも及ぶ。土の細かさを表す言葉も多様で、こまか、こまやか、しるり、漉土、脂などの言葉が用いられた。底づくりはイトキリ、ヘケソコ、底タヽキ、底作懸、輪底などの名称がみえ、底の様子が丁寧に描写されている。露胎範囲については、脛高と気包むという対照的な二語を用いて、釉薬と露胎の状態が示された。このような露胎の様子を表す豊富な言葉は、他の器種にはない茶入特有のものである。

三つ目は、露胎への名称の付与である。茶人が露胎の様子に火間と石間という新たな名称を与えたことは、ふつう土の語を用いて表す器体底部の露胎との差別化を図るとともに、それを特徴的な造形として認識したことを表している。

四つ目は、露胎の扱い方の詳説である。茶入の露胎の扱いに関する記事は、他器種に比べてきわめて多いことから、茶人が茶入の露胎へ高い関心を示し、重要な賞玩点として認識していたことがわかる。

五つ目は、賞玩の視点が最も多いことである。茶入には六つの賞玩の視点が認められ、四器種のうち最も小形で露胎範囲は狭いが、茶人はその中にさまざまな賞玩の視点を見出した。

なぜ、茶入の露胎に高い関心が寄せられたのだろうか。要因の一つは、本質的に茶入の露胎に見所となる造形が現われたためである。茶入にのみ現れた造形には、底づくり、きわめて細かい土、指跡がある。成形方法や製造過程における胎土およびの器体への関与の違いは、露胎の様子に変化を与え、茶人がそれぞれの器種へ向ける眼差しに差異が生じた。もう一つの要因は、道具

の格付けである。茶入の格は常に高位にあり続けたことで、自ずと茶人の高い関心を集め、拝見方法の徹底や拝見記を丁寧に記すなど積極的な研究態度へ繋がり、茶人の茶入に対する賞玩の姿勢にも影響を及ぼしたと考えられる。

以上のように、茶会記にみる露胎の記事、露胎を表す言葉、露胎の扱い方に関する教えなど、多角的な視点からの分析をとおして、茶人は茶入の露胎へ最も高い関心を寄せていたことを明確にした。これにより、器種により露胎に対する認識に大きな相違があることを示した。

第2節 賞玩の諸相

第3章から第5章では、茶人は露胎のどのような点を賞玩し、それをいかに評価したのかを考察した。調査結果は、[表1]のようにまとめることができる。

	胎土の様子				釉薬と露胎の関係性		
	土色	細かさ	底つくり	瘤	露胎範囲	なだれ	指跡
茶入	【高い評価】 紫色 (赤味を帯びた黒色を指す) 薄赤色 浅黄色 【低い評価】 黒色・濃赤色	【高い評価】 細かい土 【低い評価】 粗い土	糸切 【高い評価】 糸目が細く 繊細なもの ※へげ底の 評価不詳	—	【小壺】 ・範囲の狭いものの評価が高い ・脛高は好まれない 【肩衝・大海】 ・範囲の広いものの評価が高い ・脛高が好まれる	【高い評価】 露胎から底に かけて一筋垂 れたもの	・指跡の有無は 評価に直結しない ・置形の決定に際 し、なだれに次いで 重視される造形
茶壺	【高い評価】 紫のような黒色	△ ※評価基準なし	—	【高い評価】 瘤の多い茶壺 ※瘤の存在が 道具の評価に 大きな意味を もっていた	【高い評価】 脛高の茶壺 肩脱茶壺 ※脛高が高評価を得たのは 清香茶壺等 【低い評価】 格の高い茶壺の場合、 脛高の程度が大きいものは 好まれない	—	—
茶碗	△ ※紫色の記事二例あり	—	—	—	△ ※露胎の存在を 示す記事二例あり	—	—
天目	【高い評価】 紫色 黒色	—	—	—	△ ※脛高を示す 記事二例あり	—	—

[表1] 露胎の賞玩の視点と評価 (筆者作成)

(△印は記事が確認できたものの、評価が不詳のものを意味する)

露胎の賞玩の視点は、胎土そのものの様子と、釉薬との相互作用により現れる様子に大別できる。胎土そのものの様子とは、他の要素が関与していない土本来の様子を指し、土色・細かさ・底つくり・瘤の四つの視点を含む。器種別にみる視点の数に着目すると、茶入が六つ、茶壺が三つ、天目が一つとなり、器種により差が生じた。茶碗に関しては史料数がきわめて少ないため、明確な賞玩の視点を導き出すことは困難であった。

すべての器種で記述が確認された視点は、二つある。一つは土色で、茶書への出現時期が最も早く、出現頻度も他と比べて段違いに高い。土色に関する記事はさまざまな史料にみられ、露胎の第一の特徴を表す視点として認識されたとともに、露胎の賞玩においてとくに注目された要素と考えられる。高い評価を得た土色は、器種によりわずかな違いがあるものの、赤味を帯びた黒色を指す、紫色であることがわかった。もう一つは、露胎範囲である。露胎範囲を表す言葉に着

目すると、茶入・茶壺・天目の三器種に共通して、釉薬が上部で高くとまり露胎が広く現れたものを、脛高と称した。露胎範囲の評価は、茶入は器形、茶壺は格によって異なる。各器種の視点と評価の詳細は、第3章から第5章を参照されたい。

以上のように、茶入・茶壺・茶碗・天目を対象として、茶人は露胎の何を賞玩し、それをいかに評価したのかを器種別に分析した。その結果、茶入の露胎は最も賞玩の視点が多く、高い評価を得た露胎の様子や評価基準は、器種ごとに異なることが明らかとなった。これにより、茶陶評価の要諦を明らかにするための端緒を開くことができた。

第3節 露胎の新たな位置付け

以上の考察を踏まえ、室町後期から江戸前期の茶の湯においては、茶入、茶壺、茶碗、天目の露胎が同等の関心を集めたわけではなく、器種によって関心や認識の程度に差があることが明らかとなった。このうち、茶人が最も高い関心を寄せたのが茶入で、これは、製造過程における茶入特有の見所の出現と、茶入の道具の格付けが常に上位にあり続けたという、二つの要因が背景にあったためと結論付けた。これに対し、茶人の関心が最も低かった器種は茶碗である。近世初期、茶碗は高台周辺に露胎を設けるという大きな変化を遂げ、さらに露胎の多様化が進んだ。ところが、こうした転換と発展をみた茶碗の露胎に対する茶人の認識は記録されず、なぜ茶碗の露胎への関心が希薄であるのかを明確に示すことはできなかった。

茶壺については天正年間を頂点として賞玩されたが、慶長年間以降、急激に道具の格付けが下がり、茶会で用いられる機会が減少したため、茶会記には拝見記がみられなくなった。天目も茶壺と同様に16世紀後半まで多用されたが、16世紀末になると和物茶碗や高麗茶碗がそれを上回り、使用頻度が低くなる。茶室に持ち出される機会を得ない道具は、自ずと拝見の機会が減ることとなり、茶壺や天目の露胎の賞玩に対する茶人の関心を希薄化させ、結果として器種によって露胎への関心の差が開いたと考えられる。

また、寛永年間を迎えると、茶入の露胎はただ賞玩の対象とされるだけではなく、茶入の特質を見極めたり、製造時期や評価を定めたり、分類したりする際の判断の拠り所となる造形として認識されたことがわかった。これは、器体で唯一、胎土がみえる露胎は、土が有する本来の特性を高く保持していることによる。江戸前期に著された書物には、露胎の様子や底づくりが図解され、土色の定義や茶入に適した最良な土のことについて言及されており、露胎は道具を正確に理解するための重要な手掛かりとして捉えられたことが明らかとなった。

以上のように、室町後期から江戸前期において、露胎は器種により茶人の関心の程度が異なる賞玩の視点であり、なおかつ、17世紀前半からは道具の理解の指標となる重要な造形と位置付けることができる。これにより、茶陶にみる露胎の意味や意義がさらに明確になり、茶の湯文化において醸成された、日本特有の陶磁器鑑賞の一端を示すことができた。

課題と展望

茶陶にみる露胎の意味や意義をより確かなものにするために、今後は本研究で取り上げなかった水指、向付、花入などその他の器種も対象とし、現代まで続く茶の湯を俯瞰して見ることで、包括的な露胎の意味や意義の解明に努めたい。そして、施釉陶器にみる露胎を賞玩する美的感覚と、焼締め陶器を茶の湯道具として取り上げた価値観の共通性に着目し、なぜ茶人は土に魅せられるのかを美意識の側面から探究する必要がある。さらに、和物茶碗にみる露胎の出現と賞玩の関係性の考察は、大きな課題として残った。今後は、露胎のある茶碗を主体に製造した美濃や唐津の製品にくわえ、楽や高取など総釉と露胎のある茶碗が混在する窯の製品の分析を行い、茶人が茶碗に求めた造形の在り方や、露胎の変遷、茶碗にみる露胎の意味を確立する必要がある。